

1 年 算数科研究授業のまとめ（7 月 1 6 日）

1 単元名及び単元の目標

のこりはいくつ ちがいはいくつ（6 / 7 本時）

- ◎ 減法の意味と被減数が 10 以内の減法の計算の仕方を考え理解し、確実にできるようにするとともに、それを用いることができるようにする。

2 本研究授業の提案について

本時では、求差の場合において、減法の意味や式の表し方を理解させる手だてとして、以下の二つを提案した。

(1)「ちがい」ということを理解させるために、絵を動かしながら視覚的に捉えさせた。二つの事物を並べて比べ、マッチングしたものを取り去ることで、その残りが「ちがい」になるということを果物の絵を動かすことで示した。児童は、その方法を生かして、プールの問題ではばらばらになっている赤白組を、整列させると比べやすいということに気が付くことができた。書画カメラを使ってブロック操作を皆に示したことも、視覚的に捉えさせる上では有効



【資料 1 書画カメラによるブロックの提示】

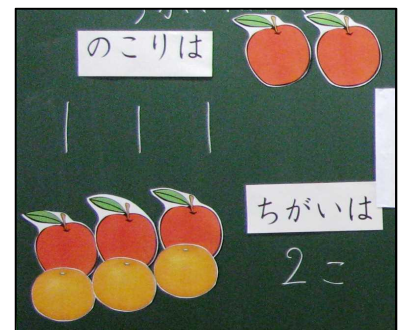
であった。（資料 1 参照）しかし求差の考え方にあわせてブロックを操作することができた児童は少なかった。求差、求残の意味をどうとらせさせるか、教師側がしっかりと整理して提示する必要があったと考える。

(2)説明する型を提示し、それに従ってお話をしながらブロック操作をするという言語活動を、授業の中に位置付けた。「ちがいは」というカードを貼りだして示すことで、児童は求差を求めることを意識し、最後に「ちがいは」ということばを使ってお話をつくることのできた。しかし、ブロック操作では求残の時のやり方をそのまま転用した児童が多く、マッチングしたものを取り去るという求差の操作へと発展させることができなかった。計算の意味と操作の意味を一致させるための支援が必要であった。

3 本研究授業の授業技術課題について

(1)教科書の問題を取り上げて授業を展開したが、求差の場面をより明確に捉えさせたかったため、教科書の挿絵を拡大して提示した。教科書は出さず、黒板上で問題と挿絵を提示したことは、児童を授業に集中させる上で有効であった。問題文を本時の学習内容に合わせ、語尾を変更したことも効果的であったと考える。

(2)本授業では、本時の学習問題に入る前に類似の問題を提示して考えさせた。（資料 2 参照）そのことで学習への見通しを持たせ、中心となる学習問題へとつなげることができのではないと考えた。しかし、児童のブロック操作にあまり反映することができなかった。求差の意味を教師がしっかりと捉え、適切な指示や発問を工夫する必要があった。



【資料 2 類似問題の提示】

4 次回の研究授業へ向けて

以上の点をふまえ、次回の授業研究では以下の点を意識した授業展開を考えたい。

- ・ 計算の意味をしっかりと捉えさせるための指示や発問の工夫。
- ・ 友達に自分の考えを分かりやすく表現し、伝えさせるための授業展開の工夫。